

瑠璃の光も磨きから Even the lapis lazuli needs polishing to shine

百瀬 由璃絵

「誰もが生きやすく、活躍できる社会とは」。この問いが、私の研究の根本にあります。大学生の頃から、現場に足を運び、大企業の経営者から地域で活動する住民、養護施設の子どもやホームレスの方々など、異なる立場の人々の声に耳を傾けてきました。1年間で100枚の名刺が尽きるほど対話を重ねる中で、社会の仕組みそのものに疑問を抱くようになりました。特に気づかされたのは、日本では「働くこと」が前提となって社会制度が設計されているということでした。例えば、イギリスでは医療が無償で提供されるのに対し、日本では親や配偶者が雇用されていないと扶養に入れず、医療へのアクセスが制限される場合もあります。この「働いていない」という状態が、貧困や孤立、制度からの排除といった問題に繋がるのではないかと考えるようになりました。一方で、「人手不足」と「働き口がない」という矛盾した声から、多様な事情を抱える人々が活躍できる仕組みを探りたいと考えるようになりました。こうした問題意識をもとに「社会問題を根本から見直したい」と社会人経験を経て進学した修士課程では、就労支援を行う社会的企業を対象に、支援内容と資金調達構造の調査研究を行いました。もともと学部で経営学を学んだことから、社会性と事業性を併せ持つ組織と金融・行政との関係にも関心がありました。調査を進める中で、障害者支援と若者支援のどちらにもあてはまらない制度の「はざま」にいる人たちの存在が浮かび上がりました。それは、単なる労働や福祉の分野にとどまらず、教育や社会構造が絡む複合的な課題でした。この社会問題の背後にひそむメカニズムを解明し、その根本にある「未知」を捉えるために、博士課程では計量社会学の手法を身につけ、複合的な課題とされる社会的排除と健康格差に関するライフコース研究を進めてきました。特に、制度の対象外となる健康上の課題を抱える「グレイゾーン」に注目し、「境界線」が社会的排除（就業状態・貧困・孤立・家族関係・政治参加など）とどう関係するのかを可視化してきました。この「境界線」への関心は、「日本人と外国人」の間にも及び、外国にルーツがある子どもや国際結婚に関する研究にも取り組んでいます。さらに、複数のマイノリティ性が重なって生じる複合的差別（インターセクショナルリティ）にも注目し、マイノリティの雇用や不平等に関する研究も進めています。最近では、キャリアと家族形成の両立に関する「二体問題（two-body problem）」の実証研究にも着手しています。これらの研究に共通するのは、一見不利に見えない人々も制度のはざまにいる可能性があり、細分化された日本の学問領域で見落とされる複合的課題をいかに捉えるかという視点です。社会の「あたり前」に埋もれて見過ごされがちな困難をすくい上げるには、他者にも気が付いてもらう努力が欠かせません。さらに、複合領域を扱う場合、複数分野をそれぞれ深く理解し、その知識を融合させる高い専門性と分析力がなければ成し遂げられません。尽きない研究課題を実証的に明らかにし、政策提言まで繋げるためにも、置かれた場所で最大限の努力をし、常に新たな光を見出すべく、自身の限界を乗り越え挑戦し続ける姿勢を大事にしています。

（ももせ ゆりえ こども家庭庁 長官官房参事官（総合政策担当）付 参事官補佐）